
緋弾のアリア～白銀の魔人～

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜白銀の魔人〜

【Nコード】

N2332X

【作者名】

暇人

【あらすじ】

アメリカの武偵の立花蒼介は二年の最初に東京武偵高校に転校して来る。

駄文ですがよろしくお願いします。

第1弾

クークー

と、隣の人が寝ている中

「久しぶりの日本だな。楽しみだ」

と、とある少年が言う

飛行機のアナウンスが聞こえてくる

「到着だ」

少年が絶叫して飛行機が着陸した後、空港を歩いてると

「全員動くな!!」

と、言う5人組の男達が銃を構えながら叫ぶ

いわゆるジャックというやつだ

やれやれと少年は呆れながら犯人達に向かって

「武偵だ。おとなしく投降しろ」

手帳を見せながら向かって。その距離300メートル。

「ふざけんな! やっちまえ」

3人が銃を持って来る。

「舐められたものだ」

少年は素手で走って、そして彼の持っている超能力の風の力を使

い相手の銃を分解する

「なっ???」

相手が怯んだ隙に三人の鳩尾に拳を打ちダウンさせる。

そのまま残った2人に向かいさっきと同じ事をして意識を奪う

「こいつ等の連行任せます」

少年は近くにいた警官にそう言って去ろうとすると

「名前を覚えてくれ」

警官が少年に言う

「立花蒼介。今日から東京武偵高校に通う武偵だ」

そう言い彼は去っていく

今は空港の前

「タクシーで行くか」

そう言いタクシーに乗ろうとすると、

「待って」

少女が声をかける

「何だ？」

彼が返事をする

「荷物忘れてたので持って来ましたよ」

彼は実は天然だった。

なんやかんやで学校付近

「おかしい。道はちゃんと聞いたはずだ」

彼は学校にいる

だが、場所は体育倉庫前。しかも、

「何故俺はUZIに狙われてんだ？」

前にはUZI5台、右にはUZIの残骸

「その人逃げろ」

普通に考えて無理である

「しゃーねー。こいつ等片付けて道聞か」

彼は二つ目の超能力の雷を使って磁力を操り弾丸をそらせる

「これで終わり」

彼は近付きUZIとセグウェイを繋げている部分をへし折り、UZIを捨てると

「その人、職員室に行きたいんだが道を案内してくれないか」と言う人居た二人の内の少女のほうが

「後でね。それよりも今はあんたよ」

少女はもう片方の男に言う

すると、立花は風の力を使いその場を後のする

「しょうがない。自力で探すか」

そう言っで見つけたのは一時間後だった。

第1弾（後書き）

感想よろしくお願いします。

主人公設定（前書き）

不定期更新ですが、よろしくお願いします

主人公設定

立花蒼介

見た目

angel beatsの音無、髪は白い

身長

180前後

体重

65〜75kg

好きな物、事

寝る事や遊ぶ事、ゲーム

嫌いな物、事

生意気なやつ、命令される事

所属科

強襲科

武偵ランク

S

装備

スプリングフィールドXD・45ACP弾

コンバットナイフ

装備は全て銀色

特殊装備

悪魔の右腕（DMC4のネロと同じ）

使える超能力

雷、風

グレード

23

二つ名

白銀の魔人

その他

両親はいなく、約一歳上の義理の姉がアメリカ

で武偵として活動してるためアメ

リ力で武偵をやっている。

英語と日本語ペラペラ

二つ名は世界中で名が知られ

ている

滅多に怒らないが、怒ると手が

つけられ

ない

右手は常に包帯で隠している。

一度右手の存在がバレて研究所

に入れられた。その時の実験のせいで、身体能力が上がった。その研究所は自分で破壊した。

主人公設定（後書き）

感想よろしくお願いします

第二弾（前書き）

心配症って自然に治るんですかね？
とても気になります。

それではどうぞ

第二弾

俺はあいつ等から分かれた後、自力で向かったが、やはり少し時間が遅れてしまった。

そして現在俺は教室の前にいる。

「すいませ〜ん。道に迷って遅れました」

「そうだったの？じゃあ、自己紹介してね」

よかった、この先生は普通そうだ。

まず、自分の名前を書いて

「立花蒼介だ。アメリカから来た、よろしく」

パチパチと拍手の音が聞こえる。

まあ大丈夫だろう

「じゃあ、立花君は遠山君の隣ね」

俺は遠山の席に着いて

「よろしくな遠山」

「キンジでいいぞ、立花」

意外だ。

見た感じネクラっぽそうなのに。

昼休み

俺はクラスの奴らに質問ぜめだ。

案外辛いんだけど。

「アメリカでは何してたの？」

「ロサンゼルスで武偵活動をしていた」

「何科に入るの？」

「強襲科だ」

「その髪って何で白いの？」

「ストレスによる脱色」

「何で右腕に包帯してるの？動かせるのに」

この質問には答えたくないが、まあ嘘を言えば問題ないだろう。

「なんとなくだ。気にすんな」

これぐらいにして逃げるか。

いいかげん辛い。

という訳で屋上

俺はクラスの静止を振り切り何とか来れた。

屋上に入って上を見ると、キンジを発見。

俺はジャンプでキンジの後ろに行つて。

「よおキンジ。一緒に飯でも食おうぜ」

何か最初にあつた時と雰囲気が違う。

「ああ、いいぜ。」

「それじゃあお邪魔して。ところで、お前何科？あとランクも」

「探偵科でEランクだ」

「嘘をつくな。あの時のお前がEランクな訳がない」

「うぐっ……………」

「まあ言いたくないならいいけど」

自分で調べるから。

「そう言つて貰えると助かる」

そうやって話してる内に昼休みが終わった。

放課後 強襲科

「今日転校して来た立花蒼介だ。ランクはS、よろしく」

「よし。じゃあ、始めるぞ」

左腕だけだと辛いんだよな。

頑張らねば。

練習が終わり、寮に帰る。

俺は人数の都合上探偵科の寮に住む事になっている。

家につくと、二人分の靴があった。

家上がり、リビングに行く

「あんた、あたしのドレイになりなさい」

何事?!

キンジ発見。よし、

「おいキンジ。どういうことだ?」

要件を聞くと

「うおつ。何でお前がここに居るんだ?!」

「俺もこの部屋なんだよ。それよりもなんだ?この状況は」

「俺に聞かれての困る」

大変だな。かわいそうに

「じゃあ、俺は荷解きすつから後はガンバ」

ちよつ待て!とか言ってるが聞こえない。

次の日

俺は時差ぼけで朝5:00に目が覚めてしまった。だから俺は銃の整備をして30分を過ごして、その後コンビニに飯を買いに行った。部屋に帰り、買ってきたカロリーメイトを食い終わり、朝のやる事全部やって朝の7:30。

キンジ曰く、バスは7:58分のバスに乗って行くらしいので暇。

俺はキンジに早く起きると念力(使えない)を送ると
ダンッ

という音が聞こえたので、迎えに行くと

激しい殴り合い（神崎の一方的）をしているので、

「アリア、登校時間ずらずぞ。お前が先に行け」

「なんで」

「なんでも何も、この部屋からお前と並んで出てってみろ。見つかったら面倒な事になる。ここは一応、男子寮ってことになってんだからな」

「うまいこと言って逃げるつもりね！」

「同じクラスなんだし隣の席だ俺たちは！逃げようがないだろ！」
神崎がむくれていると

「そんな風船みたいにむくれてもダメだ。別々に部屋を出るぞっ」

「やだ！逃がすもんか！キンジはあたしのドレイだ！」

なんかもう聞いてられないので先に行こうとすると、

「立花！お前もなんか言ってくれ！」

「わかった。一言だけ言っただけや」

俺は人呼吸おいた後に

「キンジ。爆発しやがれ、リア充！」

なっ！とか言う声が聞こえたが無視して俺は走ってその場を後にした。

放課後。俺は腕が確かだが、問題があるという装備料の平賀という人に会いに行ってる。

ここか・・・まあ入ってみるか。

俺がノックをしたら

「どうぞなのだ」

と言われたので

「失礼する。あんたが平賀でいいんだな？」

確認のため聞くと

「そうなのだ、転入生君。それで今日はどんな用事なのだ」

人を見かけただけで判断してはいけない。というのはこういうことを言うんだろっな。

「刀を作ってほしい。まあ、具体的に言えば大剣だが」

「どういふのを作ればいいのだ？」

ええとだな・・・・・・

めんどいので割愛

まとめるとDMCのダンテが使っている大剣だ。

「分かったのだ。お値段はこれくらいになるのだ」

見せてきた額は10万

まあ、注文どうりだとこれくらいはかかっちゃうよな

「あいよ」

俺は財布にあった10万を渡した。

まだ金が8万ぐらいあるので、問題ない。

出来上がるのは4日後なので短いほうだ。

俺はもうここにいる理由が無いので、部屋を後にする。

俺はその後、部屋に帰ると時差ぼけですぐに寝てしまったが、キン
ジが強襲科に戻るってことだけ聞こえた。

第二弾（後書き）

感想よろしくお願いします

第三弾（前書き）

学校が3連休できたー＼（＾Ｏ＾）／
って感じの暇人です。
それではどうぞ

第三彈

あれから少しだけ日にちが過ぎて今はあの日から4日後。なので今は装備科にいる。

ノックをして部屋に入ると、

「おおー立花君。注文の品はできているのだ」

そう言って大剣を渡してもらおう。

「うん、良いできた。硬度も重さも長さも完璧だ。予想の3倍は良い。ところで、この刀の材質は何なんだ？」

それを聞くと、まるで待っていましたー！という顔で

「その刀はタングステンに磁石鋼を少し混ぜているから素晴らしい硬度と切れ味があるのだ」

タングステンは確か世界一硬い単体金属だったはず。

「よくタングステンなんて手に入ったな。本当に10万でたりたのか？」

「実は少しかオーバーしちゃったのだ」

「んじゃこれは足りなかった分とか」

俺は机におろして来た30万を渡すと

「おおーありがとうなのだ。また御鼻屑になのだ。」

俺は刀を背中に掛け（能力で磁力を操っている）装備科からでて、強襲科に行こうとすると

prrrrrrrrrrr

電話だ。誰からだ？

「立花か！仕事の依頼だ」

アメリカ武偵局の奴らか

「仕事って？」

「アメリカから武装グループが日本に逃亡した。お前にはその始末を頼みたい。生死は問わない」

つまり、殺しても良いという訳か

「わかった。敵の場所は？」

「今から送る。終わったら連絡をくれ」

すると、10秒ぐらいでメールが来た。

場所は・・・近いな

俺は風で光の屈折率を変えて刀を消すと目的の場所に向かった。

裏路地に行くと、武装した30人ぐらいの奴らがいるので

『武偵だ。死にたくなかったら投降しろ』

もちろん英語だ

するとリーダーっぽい男が

『こんなところで捕まる訳にはいかないんだよ。お前等こいつを殺せ
！！！！』

交渉決裂かな。残念だ

俺は能力を解いて刀を出して左手一本で10キロを超える刀を持ち、
相手に向け

『お片づけだ。10分で終わらせてやる』

そういうと敵が一斉に銃で撃ってくるが、俺はバイオ5のウェスカ
ークラスの身体能力があるので、当たらない。

そのまま相手に向かって斜めに斬りつけると4人ぐらいが真っ二つ
になる。

「あはっ」

俺はそのまま敵に突っ込んでいき、全員同じ様に斬り捨てる。する
と、

『ばっ・・・化物!!!!!!!!!!』

今の俺の姿は、殺した奴の返り血で真っ赤だ。ちなみに、魔人の名
はここから来た。

もう最後の一人だ。

「じゃあね」

俺は最後のリーダーっぽい男を斬って風の能力で血を飛ばして刀を
しまい。電話する

「終わったよー場所は教えてくれた所だから」

「流石だな。まだ3分しか経ってないぞ」

そっなんだ。まあいいや。

俺は電話を切ると、家に帰る。そしてすぐ寝る。

翌日銀行に150万ほど振り込まれてた
やったぜ！超儲かった！

さて、なんやかんやで放課後だ。

神崎は今日イギリスに帰るらしい。

まあ、どうでもいいけどね

そう思いながら台場に向かっていていると、カラオケ店から出て来たキ
ンジがいた。

なんか雰囲気が違う。

とか思っていると

「立花か！悪いが一緒に来てくれないか？」

真面目な話そうだ。

「しゃーねーな。行ってやるよ」

そう言っただけ俺らは走り出した。

空港に。

第三弾（後書き）

感想よろしくお願いします

第四弾（前書き）

最近DMC4にはまっています。

第四弾

空港に着くとギリギリで飛行機に乗れた。

するとキンジが

「武偵だ。離陸を中止しろ」

するとキャビンアペンドントがいそいそと去って行った。

「そういえばキンジ。俺事情聞いてないんだけど」

そろそろ教えてくれると嬉しいんだが

「ああ、それはアリアと一緒にいる時に話す」

したらいきなり飛行機が動く出した。

どういうことだ？ 離陸は中止させたはずだ。

するとさっきもアテンダントが

「すいません。無理でした．．．」

という感じの台詞を言ったので、俺は

「とりあえず、神崎の部屋に行こう」

そう言っただけ俺らは神崎の部屋に向かった。

つーか豪華だなこの飛行機。一度でいいからプライベートで乗ってみたいな。

すると神崎の部屋に着いたキンジはノックもせずに部屋に入った。

すると

「．．．．．キ、キンジ!？」

とかなり驚いていると

キンジたちには俺は空気なんだろうが、勝手に喋り出したので、俺

は目的の話になるまで

座ることにした。

少しすると、

ガガンー!!

と、近くにあった雷雲から雷の音が聞こえると

「ひゃあ!!!」

と、神崎が情けない声をあげると、キンジがからかいだし、最終的にはラブコメみたいになる。

何だろう？端から見てるとムカつく。キンジこの飛行機ごと爆破して欲しいな〜

とか思ってる

パン！パン！

と、俺たちが最も聞きなれた音。つまり銃声が聞こえたので、俺とキンジはすぐに廊下に出ると、さっきのアテンダントがコックピットから機長と副操縦士を引きずり出している。2人は麻酔弾を撃たれたのか、全く動かない。

2人を通路に投げ捨てたアテンダントを見て俺とキンジが拳銃を抜いた。

「動くな！」

俺たちの声のアテンダントは顔を上げて、にいと、その特徴の無い顔で笑った。

そしてウィンクをして操縦室に戻りながら

「Attention please. でやがります」

ピン、と音を立てて、胸元から取り出した缶を放り投げてきた。

ガス缶か！

いち早く気がついた俺はキンジと部屋から出て来た神崎を連れて部屋に戻るうとすると。キンジが

「みんな部屋に戻れ！ドアを閉めろ！」

と、叫んだ。

すると、飛行機が揺れ、機内の照明が消えた。

まさか今のが『武偵殺し』か・・・舐めた口調だ。

そつえばさつきから何ともない。

やられら。どうやら無害なガスだったようだ。

「アリア、立花。あのフザケた喋り方・・・あいつが『武偵殺し』だ。やっぱり、出やがった」

やっぱり？ということは知っていたのかここに『武偵殺し』が来る

ことを！

すると、キンジが推理した内容を話し出した。
長いので割愛する。

まとめると、今までの爆弾はフェイクで神崎をずっと狙っていた。
という事かな。

すると、

ポーンポポン。ポーン。ポーンポーンポーン……………

ベルト着用サインが、注意音と共にワケの分からない点滅をし始めた。

「……………和文モールス……………」

と、神崎が呟いたので、解読すると、

オイデ オイデ イ・ウー ハ テンゴク ダヨ

オイデ オイデ ワタシ ハ イツカイ ノ バー ニ イルヨ

「誘ってんな」

「上等よ。風穴あけてやるわ」

神崎が拳銃を出すと

「俺たちも行く。今の俺が役に立つかどうかは、分からないけどな」
やっぱり俺も行くのか……………」

したら

「来なくていい」

ガガーン！！再び聞こえた雷鳴に、神崎は体をこわばらせた。

「で、どうすんだ」

俺が聞くと

「……………く、来れば」

俺たちが一階のバーに行くと、そのバーのシャンデリアの下のカウンターに、足を組んで座っている女がいた。さっきのアテンダントだ。

俺たちが拳銃を向けると、なんだかフリルだらけの武偵高の制服を

着ていたので、見覚えがあった。すると

「今回も、キレイに引つかかってくれやがりましたねえ」

言いながら………ベリベリッ。

アテナントは顔に被せていた、薄いマスクを自ら剥いだ。

するとキンジが

「理子!？」

「Bon soir。キンジ、オルメス。それと、『白銀の魔人』」
知ってたんだ。その廚二病全開の名前。恥ずかしいからできれば知らないで欲しかった。

すると峰が

「理子・峰・リュパン4世。これが理子の本当の名前」

リュパンってことは、フランス人。だから、オルメスっつーのもフランス語のはず。まあ、俺はフランス語なんて知らないから帰ったら調べよ。とか思ってる

ガラガラッ

と、俺とキンジの拳銃が虚ろな音を立てた。

あーあ、買い替えないといけないじゃん。どうしてくれんだよこのやろう!まだこっちに来て一回も使ってないんだぞ!!

とかしばらく思っていると峰が

「双剣双銃。奇遇だよね、アリア」

はて奇遇とは?

「理子とアリアは色んなところが似てる。家系、キュートな姿、それと………2つ名」

どういう意味だ?

「あたしも同じ名前を持つてるのよ。『双剣双銃の理子』。でもねアリア」

おいおい、俺も人の事は言えないが不気味だ。

「アリアの双剣双銃は本物じゃない。お前はまだ知らない。この力のことを!」

しゅら………しゅるるっ。

笑う峰の、ツーサイドアップの、テールの片方がまるで神話にあるメデューサの髪のように、動いて

シャッ！

背後に隠していたと思われるナイフを握り、神崎に襲いかかった。

「！」

一撃目は。驚きながらも避けたアリアだがザシュ！

反対のテールに握られたもう一本のナイフが、鮮血を飛び散らした。

「うあっ！」

神崎が真後ろに、のけぞる。

側頭部を斬られ、血が紅くほとばしる。

すると峰は意味不明なことを言い、神崎を髪で突き飛ばす。

その瞬間俺は迷いもせず、峰に大剣（通称リベリオン）で斬りかかる。

峰が躲すとカウンターが真つ二つになった。

俺は神崎と峰の間に立ち、キンジに

「神崎を連れて逃げる。俺が時間を稼ぐ」

と言うとキンジは神崎を連れて逃げて行った。

俺は峰にリベリオンを肩に乗せながら言う。

「やっと出て来た出番だ。楽しませてくれくれよ」

俺はリベリオンで峰を斬りながら壁際まで追い詰め、追い詰めたら、×字に斬りつけるがそれを屈んで躲され、更に斬ってできた小さな穴から奥の部屋に逃げられた。

俺は風で壁を斬り刻もうとしたが、浅くしか切れなかった。

おかしい。まさかこの刀、銀が入ってるのか。

新発見をした俺はリベリオンで壁を切り刻み奥の部屋に行くと、

「今日は逃げさせてもらう。じゃあ、キンジとアリアに伝えといて。いつでも2人を歓迎するって」

すると、峰は自分の周りの爆弾を爆発させ、逃げた。

ちくしょう、逃がしちまった。

したらキンジが来て

「大丈夫か？理子は？」

「悪い。逃がしちまった」

「そうか。じゃあ、俺はやる事があるから」

そう言つてキンジはコックピットの方に向かった。

その後、無事飛行機は着陸した。

なんで割愛したかつて？

やる事がなかったからだよ。

今は自分の部屋にいる。さっきキンジが出て行った。

したらキンジとアリアが帰って来た。

「よお神崎。帰って来たのか」

「ええ。それと、別にアリアでいいわよ」

ならばそうしようかな。

したら

「ア、アリアに、逃げろ」

「どうしたのキンジ。キモいわよ」

バツサリだなwww

「ぶ、武装巫女が来るぞ！」

ズドオオオオンとドアがぶち破られた音がしたので、俺はめんどそうなので、部屋に帰る。帰り際に見たのは刀を持ち、息をきらして

いる巫女服の人だった。
キンジ、死ぬなよw
w
w

第四弾（後書き）

アドヴァイス等よろしくお願いします。

第五弾（前書き）

最近とても眠いです。

第五弾

俺は部屋に戻ると、包帯を取り腕を見て

「（元に戻ってくんないかなー）」

と思っていると、腕が少しだけ光り、元に戻る。逆も同じ様になる。簡単すぎね？念じるだけって……………

まあいいや。治った事は良い事だ。

とりあえず、部屋に戻ると

「何この状況……………」

と言っちゃうぐらいに悲惨だった。

ソファは真つ二つ、家具や床に風穴が空きまくってる。

そして、巫女服の人がキンジに向かって謝ってる。

もう一度言おう。何これ！！

「キンちゃん。この人誰？見た事無い人だけど」

それはこっちのセリフでもあるが

「こいつは立花蒼介。ルームメイトだ」

「初めまして、えーと……………」星伽白雪です」星伽。これからよろしく」

「こちらこそよろしくお願いします」

ちゃんとした奴だ。こいつが部屋を荒らした奴だとは思えないな。

「で、キンジ。何で部屋がこうなった？」

「俺が聞きたい……………」

キンジもダメみたいだな。

「とりあえず、俺はもう寝る。後は頼んだ」

ちょっと待てー！とか言ってるが俺には聞こえない。

翌日。星伽を温室で見かけたのに、廊下でも会った。そういう変な現象があった日の昼休み。

「遠山君。ここ、いいかな？」

やたらうるさい学食の中、キンジがハンバーグ定食、アリアが持ち込みのももまん、俺がカツ丼を食ってたら、クラスのイケメンこと不知火がやって来た。学科は強襲科でランクはA。でも俺は強襲科に行っていないので、クラスでしか関わりが無い。

「聞いたぜキンジ。ちょっと事情聴取させる。逃げたら轢いてやる」
反対側から来たのは武藤剛気。車輛科の優等生だ。
あつ、そういうえば銃新しいの買わないとな。

何買おう？まあ、後で購買に行つて決めればいいか。

「音楽、か。まあ得意でも不得意でもないし……それでいいか、もう」

「あ。遠山君がやるんだつたら、僕もそれにしようかな。武藤君と立花君も一緒にやろうよ」

ニコッ、と涼風のような笑顔を俺たちにする不知火。

会話は聞いてなかったが、もうすぐアドシードだし、キンジが音楽って言ってたから、おそらく閉会式でのバンドだろう。

「俺はベースだつたらできるぜ」

と俺が言つと

「そついえば立花君は競技どうするの？確か拳銃射撃競技代表に選ばれてるけど」

そつだったんだ。知らなかった。やっぱりちゃんと出ようかな強襲科に。

「そつだったのか、まあ、選ばれてるんだつたら、やるよ」
今日から強襲科通いだ。

放課後

俺は購買部に寄り、新しい拳銃ベレッタ90・twoを2丁（色は白銀と漆黒）買った。

そして、今は強襲科の射撃場にいる。

俺は買った漆黒と白銀の90・twoでターゲットを撃ち終わると飽きた。やっぱりアドシールドは辞退しよう。

帰ろうとすると、

「やあ立花君。来てくれたんだ」

「不知火か。悪いがアドシールドはお前に任せていいか？」

「別にいいけど、どうして？」

面倒くさくなった。なんて言えないからな

「悪いが追及しないでくれ」

「まあ、そう言うなら僕は構わないよ」

さすが！！

「助かるよ。ありがとうな」

そう言い不知火と別れると、

俺は町に向かった。

町に行き、コンビニで晩飯を買って帰る最中に、裏路地から

「やめてください」

「いいじゃん。遊ぼうよー」

と言った声が聞こえたので、ちょっと見てみると、武偵高の女子がいた。

普段だったら見捨てるが、年下の女子だし、助けるか……

「おい。断られているのが分からないのか？」

「あん？！誰だてめえ」

「お前等に教える気はねえ。病院送りされなくなったら、さっさと消えろ」

「調子こいてんじゃねーぞ！」

と言って三人組の真ん中のリーダーっぽい奴が殴りかかって来たので、カウンターで右ストレートで殴ると、

「ぐふう……」

と言いながら、5メートルぐらい吹っ飛んで行った奴を見て他の奴らを見たら、もういなくなっていた。

逃げ足は速いんだな……

「おい、大丈夫か？」

「はい。ありがとうございます」

怪我は無いのか……よかった。

「家まで送る。場所教えてくれ」

「あつ、じゃあついて来て下さい」

そう言つて女子は橋の方に歩いて行った。

5分ぐらい歩くと、女子が

「私は西園沙耶にしおのさやです。一年の探偵科でランクはBです」

「俺は立花蒼介。二年の強襲科でランクはSだ」

と、挨拶をしているうちに

「ここです。あつ、そうだ。お礼もしたので、上がってってください」

「……ここって品川区にある数少ない高級住宅なんだけど。じゃあ、上がってってください」

すると、腕を組んで半ば強引に中に連れてかれた。

家に入ると、

「お帰りなさい。お嬢様」

と、メイドが挨拶をしている。

メイドなんて初めて見る。

「さあ、先輩。こっちです」

と、連れられたのは二階の和室。

豪華な洋館っぽい見た目なので、意外だ。沙耶（さつきそう呼んでと頼まれた）が開けると、

広っ！！！！！！

どんだけだよ旅館の広間かつ！

「君かね？娘を助けてくれたのは？」

渋い声でたぶん、親父さんらしき人が聞いてきた。

「ええ。そうです」

したら親父さんは眉を寄せてこっちを見ているので、こっちも目を逸らさずに見ていると

「ははは、そんなかしこまらなくてもいいですよ。先輩」

と言っても、あの人がそうさせてくれないんだけど………すると、

「旦那様。夕飯の準備ができております」

「わかった。直ぐに向う」

さて、俺は邪魔にならないうちに帰りますか。

俺が立ち上がり、部屋を出ようとすると、

「待ちなさい。君も一緒に食べていくといい」

MA J I D E K A

帰れる雰囲気ではないし、しゃあないキンジにメールをしとくか。

メールと夕飯を食べ終わった後、テーブルで、

「立花君。君と沙耶はどこで知り合ったんだ？」

「路地裏で絡まれてるのを助けた時が初めてですね」

全く持ってロクな場所じゃない。

「そうか。とりあえず、その件には礼を言っておく」

と言って頭を下げてきたので、俺はマツハでそれをやめさせて

「そんなの気にしないでいいですよ。武偵は仲間を見捨てないんですから」

完璧な答えのはず！

「そうか、そこまで言うなら」

と言って頭を上げたので、俺は帰ろうとすると

「今日はもう遅い。泊まって明日朝一番に学校に行きなさい」

MA J I D E K A

やばい、ヤバイ、耶馬医。

流石にここまでくると、俺の人に迷惑をかけたくない、という良心が全力で（ドラゴンボールで言うと、スーパーサイア人4くらい全力）stopをかけてくるが、

「そうですね！そうしましょう。」

沙耶さん……うんっ。僕もう諦めるよ。

さて、キンジにメールを送るか『今日はもう帰れん。さらばだ！』よしっ。

さて、どう逃げるか？

と、考えてると

「あと、夜中に表に出ないほうがいい。表には夜中侵入者対策に罠を大量に仕掛けてある」

諦めよう……ここから逃げるのは無理っ！！

風呂に入り、上がる時に

「そっいえば着替えてどうするんだろう?」

まあ、制服でいいや。

と考えてると、

「着替えはここに置いておきます」

メイドさんかな?というか、着替えて何?!

まあ、変なのじゃなきゃいいなや。

風呂から上がり、体を拭き籠(ここの風呂は旅館みたいな感じ)を見ると、

「浴衣．．．．かな?」

ぶつちやけ、浴衣と和服の区別がつかない。

まあ、浴衣を着て部屋に戻り。

親父さんに

「お風呂と服、ありがとうございました」
と言うと

「いや、気にしなくていい」

さいですか．．．．．

はっ!沙耶発見!!!突撃!!!!!!

「沙耶。どうすんだ?俺人の家泊まった事無いし、と言うよりもどこで寝るんだ?俺」

と言うと

「さあ?」

可愛らしい笑顔で言ってもダメだぞコラ。

「君の部屋は空き部屋だ。大丈夫だ、綺麗にしてある」
ならいいや。あっ!そっいえば

「お前何で襲われてたんだ?」

探偵科でも武偵だ。あの程度のチンピラぐらい余裕なはず。

「私、探偵専門だから格闘ができないんですよ」

マジかよ。ヤバイでしょ、武偵として。

まあいい。後もう一つ聞きたい事があるんだよね」

「あのメイドさんの名前何て言うの？」

「私の名前は椎名^{しいな}美咲^{みさき}です」

なるほど、美咲さんか．．．さん、でいいんだよね？年上っぽ
そうだし。とりあえず、聞いてみよう

「失礼ながら美咲さん。貴女の年齢は？」

「わたしの年齢は今年で18です」

若っ！！！！

めっちゃ大人の女性っぽいオーラ出してるよ、この年で。

「んじゃ沙耶、美咲さん。お休み」

「「お休みなさい」」

俺は空き部屋に入り、ベットにダイブすると、直ぐに睡魔が来たため、寝た。

こっから先、この子にであった事で俺の人生が少しだけ変わった事はまだ先の話。

第五弾（後書き）

感想等よろしくお願いします。

第六弾

翌朝、朝食を頂いて着替えたら、学校へ向う。ちなみに、沙耶も一緒だ。なんか、同じ事にならないようにボディーガード代わりに一緒に行くことになった。

現在時刻は6:00

早っ！！何これ？

「沙耶、お前毎日この時間に出てるのか？」

「はい。そうですよ」

マジかよ。早すぎだって……

「朝練の時間だろ、こんな時間に出るんて」

「えっ？先輩って朝練出ないんですか？！」

本気か？！少女！！（注意：一歳しか変わりません）

「真面目だな……俺には真似できん」

真面目だな……ホント。

ここ大事なので2回言いました。

キングクリムゾン？

さて、学校だ。沙耶はさつき

「私は探偵科なので．．．ここまでありがとございました」
と言って手を振りながら走ってた。

暇だな。教室行っても誰もいないだろうし．．．．．しょうがない、強襲科の朝練に行くか．．．．

強襲科、射撃場。

普通に撃つてもつまないので、自分のいる場所の隣のターゲットに弾を曲げて当てる。

「案外できるものだな．．．．」

右のターゲットの真ん中に曲射で当てる。

時計を見ると、7：50分。そろそろいい時間だな。

俺は銃を片付けて、教室に向かった。

キングクリムゾン？

という訳でバンドの練習もし終えた日の数日後。ゴールデンウィークの最終日。

俺は部屋で沙耶にメールで

『明日、夜に花火大会があるらしい。暇だったら、一緒に行かない

か？」

と送ったら、10秒後に返信が来た。早っ！！

ちなみに、返信内容は

『絶対行きます！！八時頃に家に迎えに来てください。自宅のテラスで見ましょう（＾－＾）／』

まあ、OKならいいや。

翌日

午後八時、西園家前

さて、

ピンポン

『立花様ですね。直ぐに迎えに行きます』

十秒後に執事らしき人が出て来て、

「ついて来てください。お嬢様のところまで案内します」

と言って案内して貰い、場所はテラス。真ん中にテーブルがあり、

そこに淡い青色の浴衣を着た沙耶がいた。

「どっ、どうですかね？似合ってますか？」

「ああ。よく似合っていて、とても可愛いと思う」

即答できた。

沙耶は簡単に言うと、大和撫子みたいな感じで正直言うと、ハンパない。

「そっ、そうですか……………／／／／／」

顔が赤い。まあ、セリフの選択は間違っなくてよかった。

「今日家に来てもらったのは、大事な話があるからです」

大事な話？何だろう……………

「先輩！！私の戦姉妹になって下さい！！」

戦姉妹か．．．．．まあいいか。それぐらい。

「いいぜ。それぐらい」

「本当ですか！？ありがとうございます？」

「ただ嬉しんだよ．．．．．」

prrrr

メールだ。本文には

『アドシアード当日。地下倉庫から第九排水溝付近の大広間に来い。

魔剣』

やれやれ．．．．．めんどいな。

その後、花火を見て、たわいない話をして帰ってた。

アドシアード当日。

俺は言われていた地下倉庫の大広間に行くと、

「来たか。『白銀の魔人』」

「めんどいけど、来てやったんだ。感謝しろ」

暗くてよく見えないが、2人いる。

「おい魔剣。隣の奴は誰だ？」

「そう焦るな、今紹介する」

隣の奴が暗闇から出て来た。

「久しぶり、蒼介。半年振りだけど覚えてる？」

そこには、本来ならここにいるはずのない

「姉さん．．．．．」

俺の義理の姉。立花^{あかね}緋音が、そこにいた。

第七弾（前書き）

緋弾のアリア11巻は12月発売だそうです。

第七弾

なんで姉さんがここに、しかも魔剣と一緒にいるんだ．．．．．

「さて、要件を言うと、『白銀の魔人』。イ・ウーに帰って来い」
ふざけんな。あんなクソ野郎だらけの場所に帰ってたまるか。

「イ・ウーはいいところよ。だから、一緒に行きましょう」

「残念だが、それは無理だ。緋音」

すると、姉さんは腰に携えた洋剣、通称フォースエッジを構えた。
「なら力ずくになるわ」

「変わったな、姉さん。昔は誰よりも正しかったのにな．．．．」
俺がそう言つと、姉さんは素早く俺に近付き刀を上段から切るうとするので、俺はリベリオンを抜き刀を防いだ。

「だったら俺が目覚ませねーとな！」

俺は刀を弾き距離を取る。そして、右手を悪魔の手に戻す。
すると、後ろから人の気配がするので、

「場所を変えよう」

そう言い俺は刀で天井を四角く切り、上の階に行く。

すぐに姉さんも来て、開けた穴を姉さんの超能力である錬成で塞いだ。

「始めましょう」

姉さんがそう言つと、俺はスティングァーをするが、刀の腹で防がれる。そのまま半時計回りで回りながら斬りつけるが姉さんは飛んで躲す。俺はスナッチで姉さんを手前に寄せて、右手で掴み遠くに投げ捨てる。俺はそのまま刀を逆手に持ち替えドライブを3発当てて終了。

「大したことは無かったな」

俺は刀を仕舞い、帰ろうと後ろを向いたら

「まだまだこれからよ」

「なっ……………」

振り替えると煙の中から出て来たのは、赤黒い装甲を全身に纏った様な姿をした無傷の姉さんが居た。

「魔人化。私はこれをそう呼んでる。あなたにもできるはずよ……………」

直感で分かる。……………勝てない。

「勝てない勝負はオススメできないわ。今ならまだ見逃せるわ。逃げなさい」

逃げる？バカを言うな

「俺はそういうダサイことはしないんだよ」

そう言い俺はスティングァーで突っ込むが、手で捕まれ投げ飛ばされる。

何とか着地したが、目の前にいた姉さんが俺の首を掴み壁に叩きつけるが、すぐに手を伸ばして姉さんを壁に叩きつける。その時に腰に挟んでいた日本刀を落とした。右手で拾うと

「なんだよこれ。」

日本刀を掴むと光りながら右手に吸収された。姉さんを見ると、魔人化が解けている。

「終わりだ、姉さん。おとなしく投降してくれ」

首元にリベリオンを当てて言うと、

「さすがね、私の負けよ。好きにしなさい」

「じゃあ、逮捕させてもらうぜ」

手錠を掛けるが、姉さんは立たない。

「どうした？」

尋ねると、姉さんは

「体力使い果たしちゃって立てないの」

「しょーがない奴だな……………」どうやって運ぶか、まあ、おんぶで良いよな。少し考えた後、姉さんをおんぶして

「じゃあ、キンジ達と合流するか」

前に歩き出すと

ドガアアアアアン

と少し先の前から爆音がする。

「急ぎましょう」

姉さんが言った時に見えたんだが、手錠を壊してた。ちなみに、俺の刀は姉さんが持つてる。それはともかく、走って爆音がしたところに向うと、

「逮捕よ！」

と言いながら、銀の手錠を魔剣に掛けているアリアがいた。すると、キンジが振り返り

「蒼介か．．．．．なんでこんなところに？」

「ちよつとした用事だ」

「彼女のことかい？」

俺の背中を指しながらキンジが言った。

「まあそんなところだ、さっさと帰ろうぜ」

そう言いこの日はジャンヌ（連行時に聞いた）と姉さんを綴に渡して終わり、今はアドシアードの閉会式。

「？　　」

と不知火が歌っている横で俺はベースを弾きながらチアを見てる。

あつアリアと星伽が出て来た。何か残念だな．．．．．あの2人が

一緒だと色々と比較されるな．．．．．主に胸とか胸とか胸とか

とか思っていると、正面から殺気が飛んでくる。

流石だな．．．．．勘だけは良いようだ。

ともあれ、アドシアードは無事終わった。

その後、俺は打ち上げには出ずに司法取引を終えた姉さんを迎えに警視庁に来ている。すると、直ぐに

「あつ蒼介、迎えに来てくれたんだ。ありがと？それじゃあ帰ろっ

か」

何か企んでそんな顔つきで行ってくるが、姉さんの笑顔は久しぶりだ。相変わらず美人だ。

「そうだな」

俺は姉さんと途中で別れ、そのまま家に帰り、就寝。何か日本に来てから波瀾万丈だな。大丈夫かな俺・・・

第七弾（後書き）

謎解きはディナーのあとで2が発売しているそうなので、超楽しみです！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2332x/>

緋弾のARIA～白銀の魔人～

2011年11月17日19時21分発行